

生活科における環境教育について —身近な自然との関わりを通して—

近藤 恵理

はじめに

人間は古来から「理性を持った動物」「考える葦」「道具を作る動物」などと言われている様に、知能にすぐれた動物である。そのすぐれた知能を生かして技術を発展させ、人為的に物を生産してきた。技術の進歩は目覚しく、今もものすごい速さで進歩している。私たちはこのような発展に快適さや便利さを感じて、取り巻く環境をどんどん人工化した。

発展した社会で不自由なく生活出来ているのに、自然はどうしてなくてはならないのだろうか。それは、私たちの生活に欠かせない役目を果たしているからである。例えば緑の草木は気候の急変を和らげたり、光合成で酸素を放出するなど環境保持の役目を果たしている。それだけでなく、自然は私たちに心の安らぎや癒しを与えてくれているのである。

自然と戯れ、自然の中で遊ぶ子どもには好奇心とか創造力などを見て取ることが出来ると思う。最近では公園を見ても元気に遊ぶ子どもの姿はあまり見る事が出来ない。しかし、今の子ども達が外で遊ぶことを嫌っているわけではない。今も昔も変わらず、子どもは水や土などの遊ぶ材料と時間さえあればそれを使って楽しんでいる。そんな子どもの姿を私はたくさん見てみたい。そうした中で自然を大切に、周りの環境を思いやる気持ちを学んでほしいと思う。そのような思いから環境教育について考えてみることにした。

そこで本論文では、第1章で環境教育について、第2章で環境教育の取り組み、第3章で生活科における環境教育について述べ、第4章で本論文のまとめを述べる。

第1章 環境教育とは

1 環境教育の歴史

日本における環境教育の始まりは公害学習であった。公害は明治時代に政府が日本の近代化を図るために重工業体制をとった事により起こり始めた。足尾鉾山鉾毒事件や別紙銅山の亜硫酸ガス煙害事件などを皮切りに、イタイイタイ病や水俣病などの奇病が発生し、人間の生命や健康までもが公害によって脅かされるようになったのである。そのような公害から子ども達を守ろうという教師たちの願いから1955(昭和40)年「東京都小・中学校公害対策委員会」が設立された。そしてそれが全国に発展していき、全国各地の公害教育の状況や実情が報告され、情報交換がなされるようになっていった。1968(昭43)年版の社会科学学習指導要領では第5学年の学習内容として公害教育の内容が示された。

第5学年(5)ア

「産業による公害などから生活環境を守る努力を続けている都市の事例、地球開発と自然や文化財の保護に関連した問題などを取り上げ、これからの問題の計画的な解決が今後ますます重要になっていくことを考えること。」(文部省告示、1969(昭和43)年7月11日)

その後この内容が国会で取り上げられ、1972(昭和46)年に上記の下線部分が以下のように改定になる。

「産業などの公害から国民の健康や生活を守ることがきわめて大切であることを具体的事例によって理解するとともに……」(文部省告示、1972(昭和47)年1月20日)

このようにして、人間の生命や健康、生活環境を守るということを重視した公害教育が行われていったのである。また、1970(昭和45)年には公害関連の14法の制定・改正がされて、その年の国会は公害国会と呼ばれた。この国会では公害対策を推進するための行政機関の設置についても議論され、1971(昭和46)年環境庁も発足した。

世界的な環境教育への動きとしては、1975(昭和50)年の旧ユーゴスラビアのベオグラードで開催した国際環境教育会議(ベオグラード会議)がある。この会議では、世界で初めて環境教育の目的や目標を明確にした「ベオグラード憲章」を作り上げた。その後も、旧ソビエト連邦のトビリシで世界初の環境教育政府間会議(トビリシ会議)を開催し、そこでは「トビリシ宣言」と「トビリシ勧告」をまとめ、発表している。

そのような影響は日本にも伝わり、環境教育をどのように進めるのかなどの研究が進められていく。公害教育は人間の生存に関わることを重視する一方で、他人事のようなとらえ方をされる傾向があった。公害は発生する場所も限られているし、誰かが起こしたものという見方や考え方でとらえられてしまい、原因を突き止めて防止対策をすることで解決したように思われてしまうことがあったからである。その上、公害がなくなれば公害教育を行う必要がなくなるという誤解をまねくおそれもあったのである。

それでも、公害教育は我が国の環境教育の始まりであり、原点であることに変わりはない。人間の生存や尊厳について学ぶ基本が公害教育にはある。

そのような公害教育の基本を含み、1976年(昭和51)年教育課程審議会答申で「社会科改定の基本方針」が示された。それが以下の3点である。

- 1 人間尊重と基本とする。
- 2 環境・資源の重要性を認識する。
- 3 国際理解を深める。

この3つの改定視点は相互に関わり合い、環境教育の方向性を示唆していた。そして、この教課審をうけて1977(昭和52)年度版の社会科学習指導要領で各学年に環境・資源の学習内容が位置づけられた。また、社会科だけでなく理科、家庭科、道徳、特活にも環境を取り上げられるようになっていく。その後の1989(平成元)年度版の学習指導要領

でもその内容が基本的には扱われていて、新教科として誕生した生活科でも環境に関わる学習をあげている。

1990年代になって広く環境教育の重要性が認識され始め、日本環境教育学会が設立された。文部省（現文部科学省）も生活科の新設をはじめ、各教科での環境に関する内容の充実を図っている。さらに、「環境教育指導資料」中学校・高等学校編を1991（平成3）年に、小学校編を1992（平成4）年に発行して考え方を示した。

現在は、2002（平成14）年度の学習指導要領の改訂に伴い総合的な学習の時間を導入し、その中にも学習課題の一つとして環境があげられている。

歴史を辿ってみても環境教育は認識され始めてからまだ浅い教育であるといえる。しかも、その取り組みはかなり遅れていると思う。知識だけの学習にとどまることなく、たくさんの場面で環境について考え、積極的に環境の保全に参加して行動できる力を育成する環境教育をどんどん進めていかなくてはならないのである。

そこで、環境教育を行うにあたっての目標と身につけたい能力・態度について次の（2）で述べる。

（2）環境教育の目標及び能力・態度

①環境教育の目標

環境教育の目標は文部省発行の「環境教育指導資料」によると

「環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間活動と環境とのかかわりについての総合的な認識と理解のうえにたって、環境の保全に配慮した望ましい働きかけの出来る技能や思考力、判断力をつけ、より良い環境の創造活動に主体的に参加し環境への責任ある態度を育成する」ことである。（文部省「環境教育指導資料」中・高編1991年、小学校編1992年）

この土台は1988（昭和62）年の「環境教育懇談会」の文章であり、そこではややくわしく書かれている。

「環境教育とは人間と環境とのかかわりについて理解と認識を深め、責任ある行動が取れるよう国民の学習を推進することである。すなわち、国民一人ひとりが環境と環境問題に関心・知識と持ち、人間活動と環境とのかかわりについて理解し、環境への配慮の欠いた人間の活動は環境の悪化をもたらすという認識を深め、生活環境の保全や自然保護に配慮した行動を心がけるとともに、より良い環境の創造活動や自然とのふれあいに主体的に参加し、健全で恵み豊かな環境を国民の共有の資産として次の世代に引き継ぐことが出来るよう国民の学習を推進することである。」（環境庁「みんなで築くより良い環境を求めて」環境教育懇談会報告）

②環境教育で身につけたい能力

環境教育で身につけたい能力とは目標と同様「環境教育指導資料」によると次のように述べられている。

1 問題解決能力

環境や環境問題に対して進んで働きかけ、自ら問題を見つけ、予測をたて、事象を調べる方法を考え、実施し、結果を考察、吟味し、新しい問題に対応するなどの能力

2 数理的能力

環境にかかわる事象を数量化し、定期的・統計的にその事象をとらえる能力

3 情報処理能力

コンピュータ等を用いて、必要な情報を収集し、選択し、処理する能力及び新たな情報を創造できる能力

4 コミュニケーション能力

環境や環境問題について感心を持ち、自分なりの考えや意見をもつとともに、それらの考え、意見、調査結果などを口頭、文章、映像など様々なメディアを活用して表現する能力

5 環境を評価する能力

環境を見つめ、環境状況の変化をとらえ、環境に与える影響を評価できる能力であり、事前に環境を予測的に評価したり、事後の環境状況を多面的、総合的に考察し、判断できる能力

③環境教育で身に付けたい態度

環境教育で身に付けたい態度としては同じく「環境教育指導資料」によると次のように述べられている。

1 自然や社会事象に対する関心・意欲・態度

自然や社会事象に対する関心・意欲・態度は、自然や社会への接し方やそれらを大切にしようとする心情から生まれる。身近な問題に関心を持ち、意欲的に問題解決を図るとともに、環境保全のためにどのような生活様式をとり、実践的な行動をとるべきかななどの積極的な態度を身に付けることであり、主体性の確立が望まれる。

2 主体的思考

独善的な考え方を排して、自然や人間の立場に立って、自然や社会の事象を多面的総合的にとらえるとともに、事実を尊重し、実証的に考え、公正に判断する態度である。この態度を育成するためには、自然や社会の事象に対して疑問をもち、その疑問を解明するためにはどこまでも追及しようとする意欲や問題解決への執着心をもつことである。今日の価値多様化社会においては、こうした主体的思考によって合理的で客観的な判断ができるようになることが望まれる。

3 社会的態度

環境問題に対して、自分なりの立場をもち、自分達の生活と環境の問題とを関連付けて行動しようとする心のもち方である。他人の行動、働き、願いに共感するとともに、自分でも責任ある行動を行い、仲間と協力して問題を解決していく態度を育てることが大切である。

4 他人の信念、意見に対する寛容

環境問題は、その問題のとらえ方、因果関係、環境への行動様式など多様な考え方や処理のしかたがあるだけに、はじめから固定観念にとらわれるのではなく、他人の考え方や意見に対しても、こころを広くして聞く寛容さをもつとともに、事実に基づいて主体的、客観的に判断を下せるようにすることが大切である。

環境教育は様々な環境問題について学習する教育のこのようにとらえられる場合がある。しかし、決してそのような教育でない。この目標などをみても分かるように、環境と環境問題に関心・知識をもった上で、生活のあり方や環境への接し方に自分で気づき、行動できるようになることが重要なのである。今まで大人達がしてきた行動で環境がダメージを受けてしまったから、みんなは地球にやさしくしなさいというのは子ども達から見れば理不尽な話かもしれない。子どもは大人の背中を見て育つというが、環境教育の面ではこれまでの大人達を見てこんな行動はとらないようにしようと思うぐらいの気持ちで取り組んでほしい。

次にこの環境教育で取り上げるべき環境教育の課題について(3)で述べていく。

(3) 環境教育にとりあげるべき課題

①地球規模と都市生活型の環境問題

これらは、1980年代前半になってクローズアップされるようになった環境問題である。地球規模の環境問題とは、環境庁によると「①被害、影響が一国内にとどまらず、国境を越えひいては地球規模にまで広がるような環境問題」「②我が国のような先進国も含めた国際的な取り組みが必要とされる開発途上国における環境教育」のいずれかまたは両方を満たす環境問題とされている。具体的には河川・海洋汚染、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、森林の減少、野生生物種の減少、砂漠化、有害廃棄物の越境移動、開発途上国の環境問題などである。対して都市生活型の環境問題とは、主に都市に生活する一人ひとりに起因する環境問題である。具体的には自動車排出ガスによる大気汚染、ごみの増大、家庭の生活排水による水質汚濁、騒音・振動といった問題である。

これまで歴史の中で問題となっていた公害問題は原因や影響が特定の地域や人々に限られていることが多かった。だが、この2つの問題は日本のような発展した場所に住む人々の生活そのものが関わっている。さらにその影響を自分たちだけでなく地球全体で被るというのは悲しい状況だと思う。私たちの便利で快適な生活と引き換えに周りの環境は簡単に修復できないほどの被害を被ってしまった。「地球にやさしく」「自然と共存」などと人間は都合のいい言葉を今になって言っているが、私たち人間のしたことへの代償はとても重いものだ。しかし、これらの原因に私たちが関わっているのであれば、問題を解決する方法もすべて私たちに係っている。単純な考え方もかもしれないが、環境問題は一人ひとりが問題について受け止め、主体的に解決に向けて行動していけたら地球を救うことができることなのではないか。

②食料不足による飢え、貧困の問題

現在の世界人口 60 億人のうちおよそ 8 億 3000 万人の人々が栄養不足で、そのうち 7 億 9100 万人は発展途上国に暮らしている。世界の 7 人に 1 人、発展途上国では 5 人に 1 人が、飢餓状態にあるということになるのである。そして、栄養不足の人々が最も多く住んでいるのがアジア太平洋地域だ。また世界には、国内総人口の 35% 以上の人たちが栄養不足の国が 27 カ国あるがそのうち、21 カ国がアフリカに集中していて、アフリカの国々は総人口に対する栄養不足人口の割合が高くなっている。そして、この問題を解決するには一人でも多くの人が今現在起こっている問題の事実を知り、自分たちになにができるかを考えることが一番重要なことだ。これからの世代を担う違う場所に住む子供たちが、今どのような状況にあるのか。今世界がどのような問題に囲まれているのか。そのリアルな姿を知り、問題を解決しなければならないということを理解し、私たちになにができるのかということを考えていかななくてはならない。日本はとても恵まれた国の一つだ。私たちの生活はコンビニやファーストフードが立ち並び生産・消費・廃棄という流れが毎日のように繰り返されている。その現状を把握した上で、飢餓問題に関わり苦しむ人々の気持ちを親身に受け止める心を持って行動したい。

③資源・エネルギーの問題

資源やエネルギーは湧いて出てくるものでは決してなく、限りがある。それにも関わらず、消費量は 1950 年頃に比べると 3、4 倍にも増えている。日本は少資源国と言われているように諸外国に資源を依存している。資源の埋蔵量を年間の生産量で割った数値を「可採年数」というが、石油の場合の可採年数は 45 年、天然ガス場合の可採年数は 64 年となっている。これらの数字は、もしこのままのペースで資源を採掘した場合、その年数で無くなってしまうかもしれないということを意味している。そこで、このように限りがあり、現実になくなってしまいう危険性のあるエネルギー資源に替えて、主に太陽エネルギーをもとにした再生可能なエネルギー資源の開発・実用化が急がれている。再生可能なエネルギー資源には、太陽光・熱や、風力、バイオマス、波力など太陽エネルギー起源のもの他、地球の地下に貯えられたマグマ熱を利用する地熱エネルギー、月と地球の引力を利用する潮汐エネルギーなどがある。これらのエネルギー資源は、化石燃料などに比べると、なくなってしまう心配がないこと、資源量が多いこと、政治的な駆け引きによる供給途絶の心配がないこと、環境への負荷や影響が小さいことといった特徴がある。一方で、エネルギー密度が低いことや、地域や時間に依存して変動するため安定的な供給が現在の技術や社会体制のもとでは難しい場合が多いなど、実用化に向けてはまだ課題が多いことも指摘されている。問題はあっても新しいエネルギーへの開発は私たちにとって心強い取り組みである。しかし、これらに安心することなく、身近で出来る省エネなどを実践していきたい。

④戦争と平和の問題

戦争をなくし、世界に平和を……というのはすべての人の願いである。それにも関わらず、イラク戦争やテロなど、最近のニュースは平和という言葉に程遠いことばかりである。人間は昔、世界大戦などを体験して戦争が恐ろしく、人を不幸にしかしないことを身をもって体験したはずである。そして、その恐ろしさを、戦争を体験していない人々にも伝え合ってきた。それに、我が国は日本国憲法・第9条で戦争を放棄し、これは世界中でも認められていることである。それなのにどうしてまた戦争が起きるのだろうか。世界を引っ張る先進国も加わって、戦争を起こしている状況はとても悲しいことだ。しかし、世界で起きていることを私たちがどうにかしようと思っても、直接関わることは出来ない。だが、傷ついた人の痛みを自分の問題として分かち合い、解決のために世界の人々と一緒に考えて行動し、一人ひとりが平和を心から願ひ続けることはできる。その心を持ち続けることは大切であると思う。人間を犠牲にした戦いを望んでいる人はいないのだから、平和であってこそ豊かであるとだれもが感じる世界を作り上げていこう。そしてそれを地球上のすべての場所で感じられるようにし、戦争で悲しむ人が居なくなるように願うばかりである。

以上、4つの課題をあげたが、私がはじめに環境教育として考えていたものよりも幅広い内容が含まれていた。だが、どの問題も人々のやさしさや大切に思う気持ち、地球と地球に住む人々を愛する気持ちが必要であるところに関わり合っているように思う。そんな言葉はただのきれいで、それだけでは解決しないと言う人もいるかもしれない。それでも、これからの社会を担う子ども達にはそのような心を持ってもらいたいと思うのである。そして、私たち大人も子ども達にその気持ちを真剣に伝えなければならない。その気持ちを根底に持って主体的に環境に関わり、目の前の事実や自分の生活を環境問題と関連付けながら環境に対する人間（自分）の責任と役割を理解するとともに、環境の保全に積極的に参加して環境問題に取り組む行動力を環境教育で育成していきたい。

たくさんの森林や資源を守り、エネルギーを確保し、争いのない平和な世界を作り、かけがえのない人々の命を守る。美しい地球の上で人と生き物が暮らしている風景、そのすべてが私たちの本当のかけがえのない財産であると思う。

第2章 環境教育の取り組み

(1) 小学校における環境教育の取り組み

環境は前にも述べたように、新学習指導要領の改訂に伴って学習課題の一つとしてあげられている。その取り組みも様々なものがあり、環境省ホームページによるその事例を分けてみると6つに分けることができる。

① ゴミ・リサイクル活動

学校内でのゴミの分別やごみ拾い、ペットボトルをつかったリサイクルなどの活動から

自分の行動や生活を考え、ゴミを減らすための解決策を探る。

②環境美化活動

プランターで行う花・野菜の栽培や花壇作り、新聞紙をつかった窓拭きといった環境にやさしい掃除の仕方などを通して身近な環境の美化に努める。

③自然体験活動

身近に咲く植物や昆虫を観察し、地域の自然について知る。また、教室でメダカや金魚など小さな生き物を育てることを通して自然を守ろうとする活動につなげていく。

④学校環境の改善

校庭にビオトープを作り、自然の流れで生息する生き物や植物の存在に触れることで、自然の本来の姿を知り、その大切さを理解していく。

⑤郷土・伝統文化学習

同じ地域に住む老人や伝統文化継承者との交流から自分の地域を見直し、よい文化を継承し伝えていくことなどを考える。

⑥グローバル活動

インターネットを活用した遠く離れた学校との交流や国際交流をすることで、情報を交換し環境の保全などに取り組む。

こうした活動はいずれも現在の環境問題を直接とらえた実践的な内容である。どの項目も子ども達に体験させて、理解してもらいたい取り組みばかりである。ビオトープ作りは私の知っている小学校でも行われていて、大きな池から一本細くて長い小川が作られていて、辿っていくと最後はもう一つの池にたどり着く。そこで、子ども達はそのでメダカをつかまえたり、葉っぱを浮かばせて競争するなど夢中になって遊ぶ姿が印象的であった。環境は私たちの周りにいつも当然のようにあるものであるから、意識しなければ今の子ども達は悪い状態の環境を当たり前に思ってしまうのではないかと思う。魚を切り身の状態でしか知らないような子ども達にはこのような具体的な体験を通した活動がとても効果的であり、むしろ不可欠であると言ってよいだろう。環境の本来あるべき自然な姿を子ども達が目にしたり、イメージできることが環境問題を解決することにつながっているのである。

(2) 学校外の取り組み

環境教育の取り組みは学校外でも行われている。大手の自動車メーカーや製品会社などよく目にする企業の多くが環境を考えた取り組みをしているのを知っているだろうか。

ホームページのなかで環境を考えた取り組みを紹介したり、私たちに出来るエコロジーなどを推進している。また、イベントを開いて環境にやさしい取り組みを直接体験することが出来るところもある。

ここでサントリーのホームページを紹介してみよう。

とてもかわいいキャラクターが出てきて、ビール工場についてや紙のリサイクルについて、ビン・缶の捨て方など説明をしてくれる。子ども向きのサイトなので、漫画を見る感覚で環境について学ぶことができる。

他の各企業でも環境を重視し、工夫をしながら消費者に環境保護を訴えている。今はどの家庭にもパソコンが普及している時代だ。家庭教育として、このようなサイトを利用して親と子どもが楽しみながら環境について学ぶのもいい方法であると思う。週休2日制になり、週末の過ごし方に困っている家庭もあるだろう。そんな時に、週末の休みを利用して企業が開いているイベントに参加したり、サイトで学んだ情報を実践してみるなどといった有意義な休日を過ごしてみるのもいいのではないかと感じた。

第3章 生活科における環境教育

(1) 生活科における環境教育の考え方

第1章で環境教育について取り上げて、やさしさや地球を愛する気持ちを持って主体的に環境に関わり、環境問題に取り組む行動力を育成していくことを述べ、第2章で環境教育の取り組みについて述べた。この章ではその環境教育を生活科でどのように実践していくか述べていく。

生活科は低学年において学習する教科であるので、いきなり環境問題に対する対策や資源・エネルギーの節約などについて話しても実感はわからないのではないかし、理解することも難しい。それに、行動力といっても環境教育を学んですぐに身に付くものでもない。実際、大人の私たちがさえ環境に対する影響やそれらの原因などについて正しく理解している人は少ないのではないだろうか。だが、節約の方法やごみを捨てないように工夫する方法は調べればすぐに分かってしまうことである。教師がこれはこうしようと導くことは簡単なことであるし、授業はそれで成立すると思う。しかし、それでは意味がない。生活科では環境教育の基礎となる、心を育成していきたいと考える。本当に環境や生命を大切に思う気持ちを心の中に芽生えさせたいと思う。その基礎をしっかりと育成しておけば、後の学習で環境問題などに取り組んだときも、その意味を理解し、自らの意思で環境のために行動しようと思えるだろう。現在直面している問題を取り上げ、考えることも大切であるが、子ども達の将来という視点で長い目でとらえ、環境問題が起きないような社会を作るための環境教育を行っていききたいと考える。

生活科では身の回りの環境に親しみを持って関わり、生活科の目標にもあるように体験することが大切である。環境教育を行ううえでもそれが第一歩であると思う。まずは学校や家、近くの公園、通学路などで目にする自然や施設などたくさんのもの・事について知り、好きになることである。好きになればそれらを大切にしたい、守りたいという気持ちが芽生えてくると思う。

そこで今回は生活科で行う環境教育として、自然と遊ぶことをテーマにした授業を考えてみたいと思う。遊びは子どもにとって欠かせない、子どもの仕事と言ってもよいものだ。学習指導要領でも遊びは内容の中に示されている。子どもは明るく、楽しんで遊びながら、自然や人との関わりを深めている。その遊びの中で物を作ったり、ルールを考えたり、体を動かしたりすることで基本的な能力を身に付け、磨いていくものである。現在もっている子どもの知識や体力を精一杯使って遊ぶほど夢中になり、社会を生きる力を養っていく。しかし、今の子ども達は遊ぶ場所が限られ、塾や受験に追い詰められ、遊ぶと言っても部屋の中で行う一人遊びをしているようなイメージがある。そんな子ども達が仲間と生き生きと夢中になる遊びと環境教育を組み合わせた生活科の授業案を展開していこうと思う。

これから示す授業案は、学習指導要領の内容(5)、(6)、(7)に位置づけていく。教材として主に植物に目を向け、活動をする。植物と選んだ理由は身近で親しみ易く、子どもでもすぐに見つけることが出来るからである。植物は身近でありながら、形や特徴も独特で既成の素材では感じる事ができない楽しさがある。季節や天候、条件によっても変化があるので、植物を通して空や温度などの環境にも触れることになる。また、植物に寄って来る昆虫などの生き物にも気づくこともあり、小さな生き物への愛着や関心から尊い命の存在を実感できると思う。

設定は第2学年で10月・11月頃とし、簡単な作業や話し合い活動を取り入れていきたい。児童数は30人(男15、女15)人と想定する。

授業を展開する前に、場所によって当然見られる植物は変わってくるが、ある程度植物についての知識を持って子ども達がどのような活動をするかを予想しておくための教材研究の一つとして、四季の植物についてまとめたことを(2)で述べる。

(3) 生活科における環境教育の授業案

①単元名 「秋の公園探検隊!!」

②単元の目標

・公園の植物を利用したり、生かしながら、遊びを作り出し、友達と仲良く関わりながら遊びを工夫し、楽しむことが出来るようにする。

③評価規準

生活への関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・秋の公園の様子に関心を持ち、遊びの材料を発見しようとしている。 ・秋の植物を生かして遊びを考えようとしている。 ・どんなゲームにするか自分なりに考えたり、友達と話し合ったりしている。 ・友達や1年生と遊びを楽しもうとしている。
活動や体験についての思考表現	<ul style="list-style-type: none"> ・秋の植物を利用して遊びを作ったり、遊び方を工夫することが出来る。 ・遊びで工夫したことや楽しかったことなどを表現することが出来る。 ・どんなゲームにしたいかを話し合い、設計図をかいいたりすることが出来る。 ・ゲームの話し合いをしたり、決まりを作って楽しい遊びを作ることが出来る。

身近な環境や自分についての気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・植物で遊びが作り出せることに気づいている。 ・植物を使って遊んだり、遊びを作ったりすることが楽しいことに気づいている。 ・みんなと遊ぶと楽しいことに気づいている。 ・友達の良いところ、自分がよく出来たところに気づいている。 ・楽しく遊ぶためには決まりが必要であることに気づいている。
------------------	--

④評価の方法

- ・学習カード 児童
- ・ふりかえりカード 児童2
- ・授業時の発言記録（発問に対する発言、活動中の発言・つぶやき） 教師
- ・発表表

⑤単元について

第2学年のこの時期では、過去に公園への探検などを行った経験があり、植物などにも触れてきている。校庭や通学路など毎日のように訪れる場所では、季節の小さな変化に敏感に気づくものである。子ども達は、日頃ゲームやおもちゃで遊ぶことが多いようであるが、草花や木の実、葉っぱ、土、水など自然のものをを使った遊びや創作活動をするにも興味を持って活動すると思われる。

この単元では、「秋の公園探検隊！」と題して秋の公園を観察し、植物の変化や秋ならではの植物を見つけ、遊びを考える。この公園探検で、工夫して遊びを創り出す楽しさや夢中になって遊ぶ楽しさを存分に味わわせていきたい。その後、秋の公園マップを作り、まとめとしてその結果を1生にも伝える活動をする。人に伝えると言うことは、自分の中で伝えたい大切なことを整理し、言葉にしなければならない。その活動することで、公園の植物が子ども達の中に楽しかった遊びや発見を通してより強く印象づけられると思う。1生に伝える方法の中にも遊びを取り入れていき、その方法としてすごろくゲームを選んだ。すごろくゲームを選んだ理由としては、1年生にも実際に公園探検をしたような気分を感じてもらうために、教室を公園に見立てて辿ってもらおうと考えたからである。豊かな遊びの活動・体験を通して、友達や様々な人との関わりを深めていきたいと考える。

植物がたくさん生えるのは春だというイメージがあるが、実は秋も植物が意外に多く、公園などの様子も形・色を変えて様々な変化を見せる季節である。よく知られた植物としては、どんぐり・すすき・いちょう・もみじ・コスモスなどがあげられる。名前は良く知られていないが、「バカ」と呼ばれ、洋服にくつつくイノコズチやアメリカセンダングサも見たことのある植物の一つだ。また、黄色い花で背が高いセイタカアワダチソウも見かけたことがある植物である。その他にも多くの植物が潜んでいて、子ども達は独自の視点で様々なおもしろさを引き出してくれると思う。

実践にあたって、子ども達一人ひとりの思いを大切にしたいと考え、ゲーム作りの際は仕事を分担し、グループや個人に分かれて活動を行うようにする。活動に必要な道具や材

料の調達を一緒に行い、子ども達が描く設計図に近づくように相談に乗るなどの支援をする。学習カードやふりかえりカードで自己評価を取り入れ、子ども達自身が次の活動の見通しをもって、意欲的に取り組んでいこうにしたいと考えている。授業時の発言や活動の様子だけでは見えなかった子ども達の気持ちにも目を向け、のびのびと活動が出来るように助言・援助をしていきたい。1年生との関わり方もそれぞれの場面で考えさせ、よりよい人との関係を築いていくことを期待したい。

⑥指導計画 (10時間)

- 生活への関心・意欲・態度
- ▲活動や体験についての思考表現
- 身近な環境や自分についての気づき

時数	小単元名	主な学習活動	評価
1 2	秋の公園探検隊！ ～秋の植物で遊ぼう！！～	・公園で植物を見つけ、どんな遊びができるか考える。 ・公園のどこにどんな植物があったのかを学習カードにメモする。(絵、文字) ・友達と遊び方を考えたり、楽しく遊んだりする。	●秋の公園に関心を持ち、遊びの材料を発見しようとしている。 ●秋の植物を生かして遊びを考えようとしている。 ▲植物を利用して遊びを作ったり、遊びを工夫することが出来る。 ■植物で遊びが作れることに気づいている。 ■植物を使って遊んだり、遊びを作ることが楽しいことに気づいている。 学習カード 発言記録
3 4	秋の公園マップを作ろう！！	・前回の学習カードをもとに、公園マップを作る。	▲遊びで工夫したことや楽しかったことなどを表現することが出来る。 ■友達の良いところや自分がよく出来たところに気づいている。 学習カード 発言記録 振り返りカード
5 6 7 8	巨大マップで秋の公園探検隊☆ (すごろくゲームを作ろう！！)	・どんな配置にしたいかを話し合い、設計図を作る。 ・どんな係が必要か話し合う。 ・自分が参加したいグループに分かれて準備を行う。	●どんなゲームにするか自分なりに考えたり、友達と話し合ったりしている。 ▲どんなゲームにしたいか話し合い、設計図をいかたりすることが出来る。 ▲ゲームの話し合いをしたり、決まりを作った楽しい遊びを作ることが出来る。 ■楽しく遊ぶには決まりが必要であることを気づいている。 振り返りカード 発言記録
9 10	巨大マップで秋の公園探検隊☆ ～1年生とすごろくゲーム大会をしよう！！～	・1年生にやさしく接し、一緒に楽しく遊ぶ。 ・1年生が参加しやすいようにリードし、なげかけをする。	●友達や1年生と遊びを楽しもうとしている。 ■みんなで遊ぶと楽しいことに気づいている。 発表 発言記録

(4) 授業案の考察

単元の目標が「公園の植物を利用したり、生かしながら、遊びを作り出し、友達と仲良

く関わりながら遊びを工夫し、楽しむことが出来るようにすること」であるから公園探検からまとめまで遊びを創りだす活動を取り入れるように意識した。どんな遊びが考えられるか、どんな遊びの工夫が考えられるかといった予想される児童反応は授業案の中に示してはいないが、花飾り・ドングリごま・ごっこ遊びなどの他、予想を超える新しい発想が生まれることをとても期待する。また、教室を使ったすごろくゲーム作りは、普段では出来ないような大きなものを形にしたいというイメージを現実にしてしまう理想のゲームになるだろう。前にも述べたように、子ども達が周りの身近な環境を好きになることで、それらを大切にしたいと思うようになることが環境教育を行う上で私が初めにしたいことである。ここでふれあった植物から、いつも身近なところで私たちに与えてくれていた無償の幸せを子ども達は楽しいと感じることで実感できるのではないかと思う。また、これらの植物を使った遊びを通して友達や下級生と自然の中で遊ぶ楽しさも改めて知ることができるだろう。この授業は実際に実践したものではないので、授業を進めていく中で子ども達がどのような反応をするかは想像でしかない。しかし、子ども達が植物と楽しく関わり、周りの環境を大切に感じていることを思い浮かべながら授業案を作った。そんな子ども達の姿を想像していたら、私自身が子どもの頃に友達と遊んだことを思い出した。私たちだけの秘密の場所や学校帰りにどんぐりなどを友達と競争しながら拾ったことなど、いろいろな思い出がある。久しぶりに友達と会うと必ず子どもの頃の話が話題になり「あの場所は今も残っているのかな」「またみんなであの遊びしたいね」ときまって話している。今の子ども達にもこうした経験を通して大人になっても忘れない楽しい経験とずっと残しておきたいと大切に感じる場所を持ってもらえたらいいと思う。

4章 まとめ

(1) 生活科における環境教育とは

私はこの論文で環境教育について考え、生活科で環境教育を行うなら……という私の考えた授業案をまとめた。環境教育と聞けば、ごみを分別してリサイクルをしたり、資源を大切に使う方法を学べばよいのだと思っていたので、環境教育について知らずに理解しているつもりでいたのだということがよく分かった。もちろん、そのような方法を学び、行動に移すことは大切である。だが私は今、その姿は環境教育を学んだ最終形態であると解釈している。しかも、その本質を理解した上での行動でなければならない。その本質を理解するためには、この論文の中でも何度も述べてきたことであるが、まずはこの地球に住む人・人間以外の動物・植物といった全てを愛し、やさしさや大切に思う気持ちを育まなければならないということが最も言っておきたいことである。そのようなことから、生活科における環境教育では、身近にある環境を好きになるような体験活動を取り入れていくことが重要であると思う。身近な環境を好きになるには、直接ふれあうことが一番の近道なのである。

以上をまとめ終えて感じた自分の中の新たな課題がある。その新たな課題とは、地域や家庭と協力して環境教育に取り組むとしたら、教師はどのように働きかければいいのかということだ。その理由は、学校でどんなに環境のために取り組んでいても地域や家庭での対応が違っていたら、やはり授業の中だけの見かけの解決策となってしまう気がしたからである。本論文の中で、生活科で環境を好きになって大切に思う気持ちを持てば、その後の学習に取り組んでも意味を理解して取り組めると言ったことと矛盾しているように聞こえると思う。だが、決して学校で行う環境教育は意味がないと言っているわけではない。学校での活動は子ども達が環境に目を向け、その活動からより環境に関する問題へ取り組むきっかけになっているに違いない。それに加えて地域や家庭の協力もあれば子ども達の心により伝わるのではないかと思った。学校で学んだことを学校の中だけでなく、地域や家庭でも実践できてこそ子ども達の中に環境教育に関する行動力や実践力が身に付いたと言えるのではないだろうか。家庭で取り組む方法として企業のホームページやイベントを利用することを取り上げたが、そういった小さなことでも私たちが始めると周りは変わってくると子どもも大人もみんなが思っただけで活動することが大切なのではないかと思う。

小学校は6年間と長期にわたる教育の場である。子どもは入学して卒業を迎えるまでに、心も体も一番大きな成長を見せる。この時期の成長はとても重要で、この学びはその後の教育にも影響してくるものだ。その教育に携わるのはとても責任があることだが、私はそこに小学校の魅力を感じ小学校の先生を目指した。低学年では周りの自然や物に興味・関心を持って大切にしたいと思う心を養う。そうしたら次の中学年では身近な社会的環境に触れ、自分の生活と関連付けた活動を行う。最後の高学年では環境問題を地球的規模でとらえた活動に取り組む。こういったように、その長い時間を存分に生かし、低・中・高学年の発達段階に応じた環境教育を行うことができるのは小学校だけである。長い時間をかけて、環境との関わり方を子どもの視座に立ちながら共にふれあって考えていきたい。そして学校と地域と家庭が協力しあう体系のもと、子ども達が自ら明るい未来を担って行けるように力を尽くしていきたいと思う。

おわりに

環境教育は環境問題ばかりでなく人権に関わる問題など幅広い内容を含んでいる。そのため、学校で行う環境教育もその地域の特色や子ども達の興味・関心によって様々な展開を工夫し、学校全体で取り組める教育である。そして、学校に花壇を作るといった環境美化活動やリサイクル活動、ビオトープ作りなどの環境を考えた活動がよく行われていることから分かるように環境教育はとても注目されている教育の一つと言えよう。

この論文は、私が生活科で環境教育を行う際にこうしたいという希望を込めたものだ。私がいつか教師となって、本当に子ども達に実践することが出来る機会が訪れたら、これらの思いを子ども達に伝えていきたいと思う。